



オープンハウス



bloodmaria

玄関のドアを開けて、ボクと妻は狐につままれた様子で立ち尽くした。

接待で廊下の奥からやって来た男以外、家の中には誰もいそうにない。垣根に沿って外周をグルリと廻ったときは、たくさんの物音や足音が家の中から聞こえた気がしたのに。ボクたちの他にも家を見に来ている人がいるのだな、うかうかしてたら横取りされちゃうぞ、と妻と早足になって玄関へ向かい、インターホンを鳴らした。

.....すると、それまでしていた慌ただしい気配がスッと消えてしまったのだ。

愛想よくボクたちを家へ招き入れた接待の男は西窪と名乗った。

オープンハウスとは購入予定の家の中を事前に見学できるシステムのことである。ボクと妻は新生活の居を構えるため、田園風景の名残りが目立つベッドタウンの奥地へやって来ていた。西窪は今日一日、ボクたちの物件見学を案内する不動産屋の社員だ。ボクと西窪が互いの紹介をしている間、妻は廊下を進んで立ち並ぶ部屋にざっと目を通していった。住む予定の家なのだから興味をそられるのは当然であるし、ここへは見学することが目的で来ているのだが、妻の目的は人影の探索であることをボクは気づいていた。

廊下の突き当たりまで進んだ妻が、首を振って誰もいないことをボクへ伝えてくる。その顔には疑問符が張り付いていた。

どの部屋にもテレビやラジオの類はなさそうだった。長く生きていれば音や光の不思議な伝導現象をそれなりに経験する。おそらくはそれに違いない。近辺には間隔があるものの、他にも数件の家が建っている。そのどれかが発信源となっているのだろう。

「まずは、どうされますか？ この家には地階もございまして台所より地下貯蔵庫へ降りられますが」

西窪に尋ねられて、ボクは一階の見学もそこそこに二階の案内を頼んだ。外から見えたベランダはとても広そうだったので、昔からのささやかな夢が叶うかもしれないとボクを急かしたのだ。

ベランダの造りは期待通りのものだったのでボクは内心歓喜した。これならクライニングチェアと小テーブルを置いて、休日は酒を飲みながら昼寝が出来そうである。

「そうですね。こちらは海岸を地平線に置いて見晴らしが大変素晴らしいはずです。春夏、晩秋には微風も程々吹いて、お酒を飲んで心地よく酔うにはちょうどよい場所でしょう。お酒で思い出しましたが地下貯蔵庫の奥にはワインを保管するために室温湿度を調整する専用室も完備されております。次はどちらをご見学なさいますか？」

絵に描いたような満点の営業スマイルを浮かべて、西窪は部屋の窓越しから次の見学場所を訪ねてきた。いかにも肌が弱そうな青白い西窪は、燦々と陽光が照りつけるベランダ付近を遠慮しているらしい。澆刺としていて不健康そうな素振りはないが、薄いお粉を塗ったように西窪の皮膚は白かった。

今度は妻がバスルームを見たいと云い出したのでボクたちは一階へと戻った。

ゆったりと足を伸ばせるバスタブには事故防止の手すりが付随していた。いちいち老後のことを気にしだす妻には高評価だろう。ボクも体育座りを余儀なくされて浸かるバスタブにはウンザリさせられていたのだ。

シャワーやら空調やら設備にばかり目を見張っている妻にはどうでもよいことだったが、ボクはそのどうでもよいことが気になった。

……濡れているのである。

今しがたまでタイルとバスタブが使用されていたように濡れていたのだ。空調の換気ファンもボクたちがバスルームへ入る前から動いていた。設備を説明するために予め作動させておいたのだと思うが、バスタブまで濡らす必要があったのだろうか？

なんとなしに排水口を覗いて見ると、何かが深みに引っかかっている。暗くて把握しづらかったが、それが何であるか予想はついた。

何故、そこにそれが、誰のものが落ちているのかはわからなかった。

「三、四人のご家族で入るにも十分な広さがあると思います。もしサウナを設置されたいのであれば地下貯蔵庫の一室を改築されてはいかがでしょうか？ ご覧頂ければ利用可能なことがわかるでしょう」

西窪の言葉に妻は夢心地である。

時々、西窪はずいぶん時代めいた言葉を使った。この土地の歴史にも詳しい。ボクの親戚が界隈に住んでいるが、西窪の話す近場の商店街や有名な屋敷は親戚の昔話と一致する。それをいまも当たり前前に存在しているような口調で話すのだ。特徴のある人物は好きだ。変人であっても害にならない程度なら。

ベランダから去るときに訓練中らしい自衛隊の戦闘航空機が入道雲を突き抜けて飛んでいった。真っ先に部屋を出ていった妻には聞こえなかったろう。二番目に部屋を出たボクの背中へ、舌打ちと恨めしそうな小声が幽かに届いた程度だったのだから。

「よくも日の丸空を舞うものだな。怨敵に寝返った負け犬風情め」

堆積して煮え立つ情念が恐ろしく遠い崖底から炎を揺らめかせている――西窪の短い呟きと抑揚に、あのとき、ボクの足は硬直して躓くところだった。

移動先のシステムキッチンには機能性を見せようとして、多少の台所用品が置かれていた。主戦場となるため、妻の審判の目は隅から隅まで及んでいる。

それなのに気づいていない。

並べて収納されている包丁が四、五本、やはり濡れているのだ。

「あそこのドアが地階への入口となっております、階段を降りれば倉庫と二つの小部屋がございます。ワタシ勝手の評価ですが、この家で一番素晴らしい場所でしょう。さあ、どうぞ降りてご覧下さい。さあ、どうぞ」

地下貯蔵室へ降りる入口は細長い台所の果てにあった。入口の赤いドアが、ボクの脳裏によぎる不吉な信号をイヤでも増幅させる。

西窪に云われるまま、小踊りしそうな足つきで妻は赤いドアへと進んでいった。

知らないうち西窪は台所の入口を背にして、ボクと妻を赤いドアへ追い立てる姿勢をとっている。

妻が動こうとしないボクに気づいて手を引っ張ってきた。それでも進もうとしないボクの肩口へ、西窪が顔を載せるように近づく。

「……どうかされましたか？ もう、ご見学なさっていないのは地階だけです。遠慮なさらず入ってください。得る前に品定めができる。ここはオープンハウスです」

ピースが埋まりつつある。危機感が明確化していく。

早まる鼓動が叫喚を求めている。

ボクの耳もとに寄った西窪の口内からは、怖気が止まらなくなる得体のしれない臭いがしたのだ。いや、近しい臭いは知っている。だが冷静にならねばならない。いまは、それをただの見解に留めて感情を殺す必要があった。

ドアの向こう側で音がする。階段の床板が軋んだ音のように思えた。

直感がドアの裏に蠢く気配を察知している。息遣い……重大な一瞬を待つ喉を鳴らし、潜んでいるいくつもの音。

ボクは最後のピースとなる質問を西窪に投げかけた。さも取るに足らない様子で、罨をかけた。

西窪は笑顔で答えた。

答えと同時に振り返りざま犬らしく西窪を体当たりで弾き飛ばし、次いで妻の腕を担ぐようにして引っ張り上げる。

ボクたちは玄関へと直行して家の外へ逃げ延びると、転げてしまう勢いで走り続けた。

その後、ボクの推理に妻の雷が連日落ちた。風呂に入るときも居間の隅にいるときも、ボクは窮屈そうに体育座りをさせられていた。

一週間程経って件の不動産屋から連絡が入り、ようやく晴れ間が見え出して、妻はガタガタと震え出した。

いまは、ふたりして居間の隅で体育座りをしている。

大西という男をボクたちは知らない。あの日、会うべきだった男の名前である。西窪という名前ではない。西窪という名前の社員は不動産屋にいなかった。

ボクたちを接待したのは、不動産屋の社員ではない。

大西という社員は行方不明になっていた。ボクたちが到着する小一時間前に大西はあの家に来ていたのである。『地下室の壁に穴が空いている』という連絡を最後に、大西は消息を絶ってしまった。

西窪というのは偽名のはずだ。名前も完璧に変装したかったのだろうが、社員証のうろ覚えを口にするので精一杯だったのだ。

大西が西窪に会ったとき、ボクだと勘違いしたのかもしれない。その対応から西窪は、いずれここへボクたちがやって来ること、顔合わせは初めてだと判断した。それならボクたちが大西という名前を知っていても、どうにか誤魔化せる範囲だ。いずれにしてもバスルームの排水口へ社

員証を落としたのは大きなミスだった。

バスルームの排水口でボクが発見したのは、胸に吊り下げて使う社員証である。西窪が奪った背広の左胸もとに付いていたものだ。大西と揉み合った際に紛失したのだろう。

これらのことから考えて、あのときはすでに大西は殺されていたと思う。確保しているはずの情報源を利用できない＝死人に口なし、である。

犯行現場はバスルーム、凶器は台所の包丁だ。バスルームならば殺害後の血の処理は容易い。ボクになりすました西窪がバスルームを見てみたいとでも云えば、大西は何ら疑いも持たずに自分の処刑場へ笑顔で向かう。

ここまで推理すれば、もうひとつの恐ろしい事実が見つかる。濡れていた包丁の数だ。

台所に濡れていた包丁が少なくとも四本はあった。両手に一本ずつ握ったとしても勘定が合わない。

西窪には共犯者がいたのである。付け加えるならば、どんなに広いといっても男三人でバスルームは動きづらくなる。暴れられたら、なおさら始末におえない。一対一で不意を付いた方が上手に殺害できるはずだ。それはそうして実行された予感がする。でも包丁は四本以上濡れていた。何故か？

殺害後、死体を移動させやすくするために解体したからだ。ボクたちが家の外周を廻っている間に、彼らは大西をバラバラにしてしまったのだろう。そしてこともなく、あの笑顔を浮かべて、すぐさまボクたちに対応したのである。西窪の共犯者は外へ出ていない。

真昼間にバラバラ死体を担いで外へは出られない。それに……ボクたちも彼らの品定め物件に入っていたのだから。大西の死体とともに隠れるついで、ふたりの大人を安全に殺害できる場所へと共犯者たちは潜んだのだ。台所の果てにあった地下貯蔵室の暗闇へ溶け込み、西窪に誘われたボクたちが、あの赤いドアを開けるのをずっと待っていたのである。

ボクは台所で西窪に質問した。この近くには創業二百年のうどん屋があったのだ。

今朝はそこで妻と食事したのですが、あなたはご存知ですか？ ボクは西窪にそう尋ねた。「もちろん存じております。……しかし、妙ですな。記憶が確かなら、あのうどん屋は四年ほど前になくなってしまいました。勿体無いお話です」

彼の云う通り、その有名なうどん屋は廃業していた。親戚から聞いてただけでボクも妻も行ったことがない。

西窪の時代認識にボクが不安を感じて不審がっているのは薄々向こうも気づいていたことだろう。

西窪は一瞬だけほくそ笑んだ。ボクの罠をまんまと掻い潜ったと思ったのだ。

本当に、社員証を紛失したのは大きなミスだった。

社員証の名前ばかり気にして、ネーム入れの裏口に挟まっていた食事券の名前は思い出せなかったのだ。

排水口に落ちていたのは社員証と、そこから伸び出た食事券。

食事券には廃業したはずのうどん屋の名前が記されていた。そうだ、廃業後にうどん屋は新しく再開されていたのである。自分の社員証に挟まった連番続きの長い食事券をどうやったら忘れ

られるだろう？ 他人からもらった程度の食事券なら、せいぜいバッグに忍ばせるぐらいだ。社員証の裏側にあれだけの枚数を入れているのだ。よほど自分の食欲をそそるもののはずである。

食事券の挟まった社員証が西窪の着ている背広のものなら、その背広を着ている西窪は社員ではない。状況的に、あの家で社員証を落とすのは不動産屋の社員であり、背広を借りたとしても、社員証があるなら営業中は付けるのが規則のはずだ。

一応、ボクたちはあの家での出来事を警察に話した。担当の刑事は磯野と名乗った。

わかってはいたが、磯野刑事は歯切れの悪い態度を示した。つまりボクたちの話は、どれも状況証拠の域を出ないのである。あくまで推論だ。西窪は姿を消して、大西は行方不明のまま、死体は未だ見つかっていない。西窪が社員のふりをした不審人物でなければ、体当たりを食らわせたボクの方が立場的にマズイとも云われた。

警察の調べで地下貯蔵室の壁には地中深く降りていく狭いトンネルのようなものが発見されたらしいが、いざ詳しく調査という段階で崩落してしまったのだという。

一体、西窪と地下貯蔵室に隠れていたであろう者たちは何だったのだろうか？

大西を殺害してボクたちも襲おうとしていた動機は、これも想像の域を出ない。……想像するだけで身の毛もよだつ。

それだけは磯野刑事に話せなかった。さすがにそんなことを口にすれば、完全に取り合わなくなってしまうだろうから。想像が現実のものなら、大西は永久に見つからない。

潜水艦による任務が間近に迫っていた頃、磯野刑事から樋上という人物を紹介された。その老女は一年前、あの家の付近にそびえる山で息子を失っていた。樋上の息子は高校の友人たちとキャンプ中、焦燥しきった声で実家へ電話をかけてきた。死亡推定時刻はそれから二時間後のことだ。

「みんな、穴の中へ落ちていった。朝起きたら地面に穴が空いていたんだ。昨日までなかったのに。みんな不思議がって眺めていたら、大昔の軍服を着た奴らが現れて、みんな穴の中へ落としていった。瑠川は逆らって、喉をナイフで……アイツら美味そうに噛み付いて……白い顔が。オレは逃げたけど声がする。まだ誰か生きてて呼んでるんだ。助けにいかないと」

樋上の息子だけは発見された。友人たちと一緒に、せめて行方不明になっていればよかったのにと樋上を目前にして思わせられた。樋上は廃人と化しつつも、息子への想いで無理矢理に思考をこちらの世界へ繋ぎ留めている状態だったのである。ボサボサの白髪の間隙から窺える目は話が進むにつれて異様な光を帯び、静かな声にはベランダで呟いた西窪と同じ熱が籠っていた。

崖から転落したとされる樋上の息子は、倒木の太い枝で串刺しにされていた。肋骨、背中、太腿を中心に肉は食いちぎられており、生活反応から串刺しになった半死のうちに猛獣たちに襲われたものと断定された。あの山や周辺の河口では行方不明者が毎年出ているようだ。樋上はボクの体験した話を聞くと『ヤツらだわ！！』と息巻いて喫茶店を飛び出していった。無鉄砲にも、あの家に向かったのだろう。ボクは磯野刑事に電話して樋上を保護してもらうよう頼んだ。

「これ以上の捜索はしないことに決めました。もちろん不審者の情報は引き続き受け付けます。申し訳ありません」

ボクの家へ刑事が訪れた。西窪の捜索を打ち切ったことを告げられた。事件性の低さを考えれ

ば仕方のないことである。

担当は磯野刑事のはずだったのに彼の姿が見えないので気にかかった。そのことをボクに尋ねられると刑事は悲壮な顔つきをして驚くべきことを云った。

「まだ報道されていませんが、実は……自殺しました。署内のトイレで拳銃自殺を。樋上という方が電車にはねられて轢死しましてね。自分のせいだと心底悔やんでいました。勿体無い話です」

一礼して刑事は玄関から去ろうとした。ドアが開いて真昼の日差しがフラッシュする。

やけに色素が薄い肌の刑事は、さらに輪郭がぼやけそうなほどの本来の白さを露呈した。

「この季節の日差しには参ります。見ての通りワタシのようなものにはキツイですよ。こんなときは鍾乳洞でもほっつき歩いて涼みたいですね。そういえば海上自衛隊の方でしたね。潜水艦で海の底というのも涼しそうです。今度ぜひ洞窟探検でもしましょう。……ランチを抱えてね」

呆然と立ち尽くすボクに営業スマイルを浮かべて刑事は颯爽と歩いて行った。

「お前、どうすんだよ。あんなに代休使って新築探してたのに。今度の艦は甘くないぞ。休みなんか減多にもらえないからな。奥さん、妊娠して病院にいるんだろ？ 誰が新しい家探すのさ。船上のピアニストみたいに艦で一生暮らすか？ 希な物件だと思うよ。希ってだけで誰も羨ましがらないけどね」

基地の食堂で友人にからかわれてもピンとこない。問題なのは承知しているが、あまりにもたくさんさんの不可解事が起こり過ぎて、何から手をつければいいのか頭が追いついていないのだ。

「やあ、キミたちが新しいクルーか。そのままで構わない。ワタシも同席させてくれ」

ボクと友人は慌てて敬礼して艦長をテーブルに迎えることになった。

艦長がイスに着くと取り巻きの隊員たちは腕を後ろに組んでボクたちのテーブルを囲んだ。

何の冗談だ。

ボクは目眩で身体が崩れかけた。いっそ発狂する機会を失ったのが恨めしい。

艦長も取り巻きたちも頬骨が浮き出るくらい痩せこけていた。かといって貧弱にも見えない。澆刺とした態度は必要な筋肉を隆起させてキビキビと動いている。いまの日本人には真似のできない兵士の動作、思想や誇りから来る根本的に別種の力が彼らには宿っていた。それでいて人とは思えない、獲物をじっくりと狙い続ける爬虫類地味な執着心が目をぎらつかせている。

たくさんさんの真っ白な顔面がぎらぎらと炎を揺らめかせてボクを見ていた。

ボクの家を訪れた刑事とそっくりな営業スマイルを浮かべている。

どこまでも透明で空っぽの。

あのオープンハウスで会った笑顔が咲き乱れている。

「キミの話は"息子"から聞いているよ。アイツはワタシ以上に気難しいヤツでね。正直、他人を褒めるのを見たことがない。"息子"はキミを絶賛していたよ。まんまとやられたとね。勘違いしないでくれたまえ。ホントに褒めていたんだ。キミの素早い状況判断と機転、それを実行する勇気を賞賛していた。"食事をしなくてよかった"と云っていた。同郷の者にですら、あんなことは云わない。ぜひ友達になりたいそうだ。ワタシとしても今後の活動を考えて、"そちら側"の友達が欲

しい」

取り巻きのふたりがボクの隣に座っていた友人を立たせて廊下へと連れて行った。

艦長とボクはテーブルの下で膝小僧同士をくっつけていた。もうじき白い笑顔はボクの鼻先へ到達しそうである。

「時代は我々を否定した。たかだか一度や二度の失意で他の者たちは飼いならされ、ワタシのようなものたちはその志を地下深くへと追いやられたのだ。潰えたと思ったろう。だが我々はいまここにいる。長い年月を経て、来るべきときを夢見てここにいるのだ。苦難は我々を変貌させて畜生道へと落としたが、志は変わらない。せっかくこうして知り合えたのだ。考えてみて欲しい。時間はたっぷりある。今回の哨戒任務は長いからな。まずは、お互いのことを知らなくては。ああ、そうそう、実はキミの奥方が入っているのは同郷の者がやっている病院でね。腕は一流だ。心配しないで任務に集中していい」

肉の臭いがする。普通に食される肉ではない。血の滴る生肉の臭い。きっと牛とも豚とも鳥とも違う。

「我々は少しずつ這い上がり、地上に住むようになってきた。狭く窮屈な暮らしは嫌いだろうか？

時折、湿気と暗闇は恋しいが、やはり地上は素晴らしい。奪還するのだ！地上には我々こそが相応しい！ 誰に止める権利がある！？ ここは！！ 我々の！！ オープンハウスなのだから！！」

艦長の演説を締めくくるようにして、廊下からパンという甲高い音が打ち鳴らされた。

ボクの身体はぐにゃりと無様にテーブルへ突っ伏す。

現実へとボクを吊り上げていた正気の糸は途切れたまま、もう二度と元に戻らないよう祈るだけだった。